

第43回 スポーツリレートークレポート

2019年8月21日(水) 19:00～20:30

仙台市宮城野区中央市民センター 第3会議室 参加者 45名

スピーカー 隅田 翔 氏 コバルトーレ女川 育成部 U12監督

～ 地域に活かされるサッカークラブ・コバルトーレ女川

千葉県市川市出身。習志野市立習志野高校から駒澤大学に進学。2006年に卒業後はコバルトーレ女川の設立と同時に女川町に移住して同クラブでプレー。日中は地元の水産会社に勤務しながら4シーズンプレーして東北社会人リーグ1部に昇格した2009年引退。引退後も水産会社に勤務しながら2013年までクラブのアカデミーコーチとして指導。2014年からクラブの専属スタッフとしてクラブ員や保育所、幼稚園の子供たちにスポーツを通して指導する。クラブの主催大会の開催や合宿誘致などスポーツによる地域活性化などの事業も手掛ける。また町内活動においては女川町商工会青年部や女川町消防団など地域と連携した団体にも所属する。今後も様々な形で女川町を全国に発信する活動を行っていく。



<自己紹介>

コバルトーレ女川の隅田です。千葉さんからのバトンでここにおります。最初に自己紹介させていただくと、現在私は石巻専修大学の非常勤講師を千葉さんと一緒にしています。年齢は36才でコバルトーレ女川というチームの設立当初からかかわってきました。出身は千葉県の市川市というところでいわゆる東京のベッドタウンでしょうか。高校は野球では甲子園にも出場した習志野高校でスポーツの盛んな学校です。大学は駒澤大学でサッカー部に所属していました。プロにはなれませんでした。アマチュアでもサッカーを続けたいと思い、コバルトーレ女川の2006年のセレクションを受けました。現在は小学生の監督のほかに女川高等学園で、軽度でコミュニケーションに支障のない子どもたちにボランティアでサッカーのコーチもしています。他には女川町商工青年部に所属し、そのつながりで随分コバルトーレを盛り上げてもらっています。今年からはまだ訓練などには参加していませんが消防団にも参加しています。

※ 写真と映像での説明 下記YouTube「もう一つの昇格ものがたり」

<https://www.youtube.com/watch?v=IKocQgzO1vY&feature=oembed>

この映像は大変私たちの活動をわかりやすくまとめていただいています。日中は水産会社で働きその後練習、普通は火曜から金曜が練習で土曜に試合、日・月とお休み、その繰り返しです。映像にもありましたが当時弁論大会にださせていただき、自分の考えをまとめましたが、その気持ちは今もほとんど変わっていませんので、ぜひ、読み上げますので聞いていただきたいと思います。

「題目：我が町女川

今から約三年半前の2006年3月末、私は大学を卒業してすぐに女川に移り住みました。目的は、そう！サッカーをするためです。「女川にサッカーをしに来る！」皆さんはこの言葉に違和感を感じるのでしょうか。女川にサッカーチームが在る。町に若者が移り住む。この事実が想像もできない事だからでしょう。私たち当時17名は突然のようにこの町にやって来ました。過疎化、高齢化の進んでいるこの町に若者が集団で来る。てっきり町の人達から喜ばれると思っていました。ですが、実際は町ではコバルトーレの存在を知っている人はほとんどいませんでした。そして私たちも町の人、町の事は何も知りませんでした。

私たちは普段、平日の日中は町の水産会社で働いています。仕事が終わってから夜に練習という生活をしています。そして主に日曜に試合をしています。町の人からは仕事とサッカーの両立を誉めてくれる半面「大学まで卒業してなんで水産業で働くの?」「もっと収入のいい職種があるんじゃないの?」と言われる。実際これが私たちに対する本音でしょう。金銭面や肉体労働だけをみれば疑問に思うかもしれません。ですが視点変えて見ると、女川の活動の原動力と言ってもいい水産会社で働けるという事は、チームにとって町の中に飛び込む事のできる願ってもない職場なのです。職場で町の人達と一緒に仕事をして同じ汗を流す、そして信頼を得る。この積み重ねがチームにとって大きな財産となっていきました。実際、私たちの一番身近にいる職場の人達が我が子のように慕って試合を観に来てくれます。これも職場で信頼を得た証でしょう。町に来た当初。働く場所もなかった私たちにとって水産会社で働いて生活の基盤を作れるという事はありがたいことです。

また、親身になってくれる人ほどこのような言葉をかけてくれます。「将来の事を考えなさい!」「いつまでも好きなことばかりできない!」ですが私たちは、将来よりも大切な今を一所懸命生きています。この町で思いきりサッカーをしながら町のため、チームのためそして自分自身の成長のために生きています。「サッカーで勝つことが町のためになる」その思いがプレーを奮い立たせる力になり今年の東北2部リーグ優勝。1部昇格という結果にも繋がりました。また、ピッチの外でもごみ拾いによる町内の清掃活動。お祭りへの参加。サッカーを通して子供たちにスポーツの魅力を伝える。こういった地域貢献も含めた活動が、選手たちにとってこれから社会で生きていくための力になる。そう信じています。

三年半前は私たちを知る人ほとんどいなかったこの町。ですが、信頼を重ねることによってコバルトーレというチームそして「隅田翔」という人間を少しずつ理解してもらえるようになりました。この一から信頼を築くという過程の中に、社会に出て生きていく大切な要素があるのでしょうか。「細部にこそ命が宿る」という言葉もありますが、挨拶や何気ない会話。一見シンプルな内容に見える会話ですが、こ

の地道な会話の一つ一つの積み重ねこそが信頼を得るということに繋がるのでしょうか。そして、こういった町民の何気ない会話の中にコバルトレーの存在があがってくれば嬉しいです。コバルトレーが在る事によって、時には町民同士を繋ぐ接着剤のような役割に、時には人と人とを結び会話の道路のような存在になりたいです。

都会の眩しいネオンの明かりもいいけれど、女川の暗い夜に見える満天の星空が好き。小鳥の鳴き声と共に起きる女川の朝が好き。美味しい魚が食べられる女川が好き。そして、何より人と人との結びつきを大切に作る町の人達が好きです。この町に来て人の温もりに触れ、温かさを感じるようになりました。

初めはサッカーをするためだけに来たこの町ですが、いつしか町の魅力に引かれこの町の活性化の力になりたいその思いが強くなりました。この町の魅力をコバルトレーと共に全国に伝えていきたいです。我が町女川。私にとって後からできた故郷です。」



<女川とコバルトレーについて>

約10年前の自分の文章、今読んでも自分の想いは何も変わっていません。ここからは「女川町」についてご紹介します。人口は約6,400人、震災前は約1万人で、ほぼ一割の方が亡くなられたり行方不明になりました。その後も仙台などに移り住む方が多く、人口減少率は37%にもなります。原発のある町でもあります。私はこの数値だけで悲観的にはなっていません、他から移り住む若い移住者もいて、色々なものも生まれてきています。

コバルトレーのエンブレムの意味を説明します。メインはコバルトブルーで、女川町にある青い海を示しています。そして自然豊かな森、ふちの緑がそれをあらわします。フランス語で森を「フォーレ」といい、コバルトレーは海と森をつないだ造語です。外の黄色の部分の「女」の意味、白い模様は「ウミネコ」が朝日をあびながら飛んでいる様子です。女川のシーパルピア商店街、時間があれば元日の初日の出をみていただきたいものです。その日は道の真ん中から朝日が昇るように設計されているのです。

次にコバルトレーの歩みです、2006年にチームが設立。最初は石巻市民リーグからのスタートでした。対戦相手はサッカーを趣味として活動しているチームとの対戦が多かったです。一年で宮城県リーグに、次の一年で東北社会人リーグの2部に昇格、2年後に1部に昇格、それを機に自分は引退子どもたちの育成に関わるようになりました。自分が経験してきたことを伝えることがチームのためにな

ると思い、水産会社で継続して働きながらボランティアで子どもたちに教えました。水産の仕事が本当に好きで、一度は本気で水産の仕事をやりたいと思ったものです。もしかすると震災がなければやっていたかもしれません。残念ながら震災で解雇となり、夢はかないませんでした。2017年に社会人リーグで優勝し夢がかなってJFLへ昇格しましたが、色々な人の思いが実っての昇格でしたが現実は厳しく一年で降格、選手の補強や運営の難しさをクラブ全体で感じました。今年は東北社会人リーグ1部に参戦していて、現時点では一位が資金力のある「いわきFC」、二位が「ブランデュー弘前」となっていて、コバルトレは三位ですが、ぜひ全国地域チャンピオンズリーグに進出できるようにしたいです。

2017年の全国地域チャンピオンリーグの優勝の際には、全国から色々な方に応援にきていただきました。日中選手が仕事をしている「就業支援パートナー」という企業では、職場で信頼を築くことで応援にきていただいています。水産会社、病院、生協などいろいろな企業で選手が働くことで、人のつながりが出来ています。それが、地域リーグでのプロに負けない所であり魅力だと感じています。女川駅にある温泉「ゆぼっぼ」は、コバルトレが試合で勝つと入浴料が半額になり、受付の職員もコバルトレの応援Tシャツを着てくれます。そうした地域からの支援があるのが女川の特徴です。

おながわ秋刀魚収穫祭などには試合とぶつからなければ積極的に参加し、ゴーグルをつけて秋刀魚焼きも頑張っています。女川や石巻、東松島では年間約100回くらい保育園などへボランティアで訪問。サッカー教室を行い、サッカーの楽しさを伝え、コバルトレのことを知っていただくようにして、一年で延べ2千人の子供たちとふれあっています。



<地域を発信する>

次に地域を発信する取組として、女川でサッカーの大会を町内の方々と連携して開催しています。ひとつには震災を風化させない、また、少しでも地域経済の活性化につなげたいという思いもあります。具体的には今年の春と夏にジュニアとジュニアユース年代の大会を開催しました。ぜひ、継続していきたいと思っています。大会の優勝チームには、シャーレの代わりに地元の職人さんが作った木製のキャティングボードを進呈するのも、地元の飲食店で懇親会を開くのも、女川に少しでもお金を落としたいと考えているからです。震災の事については女川観光協会の職員による語り部ガイドやプロジェクターを使用した映像を用いて震災講話を行っています。この取組は、子どもたちの保護者からも人間的な成

長にも繋がり参加して良かったという声をもらっています。

先日、Jリーグの下部チームの子供たちが女川に集まってくれました。今年度中に人工芝のグラウンドがもう一面完成します。今後はより全国規模の大会を誘致し地域への経済効果を生んでいきたいと思えます。夕食は中華料理店を貸切にして食事を食べていただき、参加した指導者の懇親会も開くなど、女川に来てくれた関係者全員が楽しめるようにしています。こういった事が実現できるのも、まわりの町内業者の協力があるので思ったことが形になりやすいのです。

<コバルトレーの未来>

コバルトレー女川の未来については、もちろんJのつく舞台を目指したいと思えます。そして、サッカーを通じて地域の活性化をしていき、若い人が誇れるまちにしたいですし年配者にとっては暮らしやすい町にしたいと思えます。女川には様々な業種で女川の為に強い思いを持った人達があります。その人達と共に「チーム女川」で魅力的なまちにしていきたいのです。本日はありがとうございました。

文責 泉田 和雄

